

ソグド王離宮を掘る

—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)
2022年度発掘調査—

宇野 隆夫 帝塚山大学客員教授

寺村 裕史 国立民族学博物館准教授

村上 智見 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター特任助教

ベグマトフ・アリシエル ニューヨーク大学客員研究員

ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所上席研究員

ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究所上席研究員

サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所研究員

Excavations at Kafir-Kala in Uzbekistan in 2022: The Residential Area (Shahristan) of the Sogdian Royal Residence

UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University

TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology

MURAKAMI, Tomomi Assistant Professor, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University

BEGMATOV, Alisher Visiting Research Scholar, New York University

BERDIMURODOV, Amridin Senior Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

BOGOMOLOV, Gennadiy Senior Research Fellow, Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology

SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Institute of Archaeology

1. はじめに

日本・ウズベキスタン共同発掘調査隊は、ソグド人の歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目的として、2013年度よりウズベキスタン共和国サマルカンド市のカフィル・カラ遺跡において発掘調査を実施している。2020年度はCovid-19の影響により

中止となったが、2021年度は現地隊員によって調査を行い、2022年度には日本隊も参加して調査を実施することができた。

2019年度までの調査ではシタデル地区の火災層までの遺構面全体を発掘し、シャフリスタン地区の北寄り最も高い箇所(西側中央)に約10×10 mの調査区(Tr N5)を設定した(図1)。2021年度は、その続きと



図1 カフィル・カラ遺跡 2022年度発掘区

して南側に約2.5m拡大した調査区(現トレンチは12.5×10m)で発掘を実施した。その結果、調査区内において厚さ最大2.5mの建物壁が東西南北にそれぞれ検出され、南北10.77m、東西10.15mのほぼ正方形の部屋が存在することが明らかになった。本年度はその調査区(Tr N5)の発掘を継続し、大型建物(Room 1=大ホール)の全容把握に向けて発掘を行った。

2. 市街地エリア(シャフリスタン)Tr N5の継続調査

2.1 大ホールの調査

シャフリスタン地区トレンチ Tr N5において、大型建物(大ホール)の調査を実施した(図2)。本建物は昨年度の調査において9世紀頃までの堆積層を発掘し、その下に8世紀初め(西暦712年)の戦闘によって生じたと思われる火災層が存在することを確認していたものである。

調査の結果、この大ホールが、基底部1辺10m余りのほぼ正方形であること、4辺の壁際にスファ(ベッド状の高まり)があること、北側スファの中央部に南に張り出す長方形の日干しレンガ敷きがあること、門(隣室との出入り口)は南側の東寄りに1箇所のみ存在することを確認した(図3)。建物の壁は日干しレンガで構築し、表面に厚さ10cm弱(7cm前後)のスサ入り粘土の壁土を厚めに塗り、その上に水簸した粘土の薄層を重ね、さらに数層からなる漆喰を塗布し滑らかに仕上げ、そこに壁画を描いている(図4)。ただし火災のため壁画の残存状態は良好ではない。

[大ホール主要諸元]

東壁(南北壁)長さ：10.77m(壁土抜き)
 西壁(南北壁)長さ：10.35m(壁土抜き)
 北壁(東西壁)長さ：10.52m(壁土抜き)、10.35m(壁画面)
 南壁(東西壁)長さ：10.15m(壁土抜き)、10.7m(修復後)
 スファ内側床面：南北7.6m、東西7.6m
 北側スファ張り出しレンガ敷：東西3.39m、南北0.92m
 門(隣室との通路)：幅1.5m

2.2 日干しレンガのサイズ

大ホールが焼失した8世紀初めの時点で使用されていたと考えられる日干しレンガのサイズには、2種類がある。

日干しレンガa類は、壁積みに用いているものであり、平均長辺幅53.2cm、短辺幅29.6cm、厚さ



図2 Tr N5 調査風景(南西方向から)

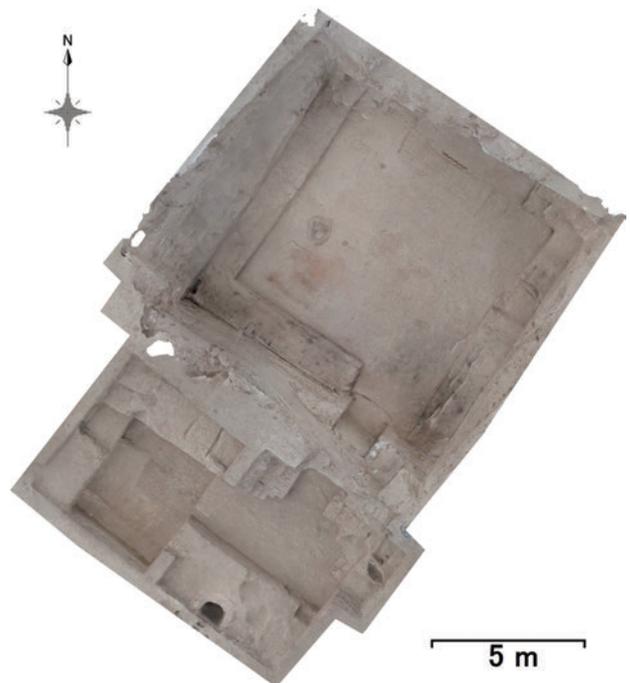


図3 Tr N5 平面図(SfMにより作成した遺構オルソ画像)



図4 南西隅の炭化物和被熱で赤くなった壁面の漆喰と壁土。壁土が剥離した裏側には日干しレンガが確認できる



図5 大ホール東壁：日干レンガ積み状況(SfMによる写真測量)



図6 大ホール南壁：日干レンガ積みと隣室との境界通路の状況(SfMによる写真測量)



図7 壁から崩れ落ちた日干レンガのブロック

10.7 cm である。測定数は 130 点であり、標準偏差は長辺 2.350、短辺 0.922、厚さ 0.662 と規格性は高い。積み方は長手積みだけの段と、小口積みだけの段を交互に繰り返すいわゆるイギリス積みであり、短辺幅が長辺幅の二分の一でないのは、縦方向の目地をずらして壁の堅牢性を高めるためであろう。注目すべき点は、大ホール東壁の壁土を除いた長さが 10.77 m となることである。これは長手積みにしたレンガ 20 枚分と推定できる ($10.77 \times 100 \div 20 = 53.85$)。日干レンガの長辺の平均幅は 53.2 cm であり、2 mm 前後の目地を考慮すればその一致率はかなり高い(図5・6・7)。

日干レンガ b 類は、レンガ敷きに用いているも



図8 大ホール北辺の壁際：日干レンガ敷き遺構(下が北)

のであり、平均長辺幅 51.5 cm、短辺幅 27.0 cm である。測定数が少ないため標準偏差は算出していない。短辺幅が長辺幅の二分の一に近いことは、床に敷くことを考慮しているのであろう。ただし正確な二分の一ではないため、ややズレを生じ、目地などで調節している(図8)。

3. 出土遺物

本年度調査においては、出土遺物の種類は決して多くはないが、土器片や大量の動物骨、壁画片や炭化建築材および貨幣を検出した。

動物考古学を研究するデルフィーヌ・デクリュエナール氏によれば、骨の多くはヒツジやヤギのものであり、中には魚の骨などもみられる。

壁画片は激しく被熱して保存状況は良くないが、色や文様が確認できる断片があり、西壁に沿うスファ沿いでは、図像の判別できる資料が出土した。色は青または濃青、白、黄、赤などが見られ、青色の地に白鳥の首のような曲線が描かれたものも見つかっており(図9・左)、アフラシアブの壁画などに描かれた文様を想起させるものである。昨年度までに出土した壁画片の保存・修復作業なども含め、壁画の詳細についての研究も進める必要がある。

この大ホールの火災層から貨幣が一点出土しており、クリーニングして確認したところ、タルフン王のものであることが明らかになった(図10)。シタデルの大火災が8世紀初めにおきたという推定はこのタイプの貨幣に基づいており、本トレンチの火災層からもタルフン王の貨幣が発見されたことは、ここの火災もシタデルの火災と同時期に起きたことを裏付けている。



図9 壁画片の出土状況



図10 タルフン王のコイン写真

4. 結び

以上で述べた大ホールは、形・規模・構造・壁画などからみて、当時の最高クラスのもので理解できる。シャフリスタン地区におけるこの施設が、ここに邸宅を構えた有力貴族のものであったか、またはシタデル地区の推定玉座の部屋は儀礼用のものであり、当該施設のようなものが王あるいは王族の居住空間、あるいは役割が異なる公的空間であったかなどが、今後の検討課題になるであろう。

さらに、この部屋の出入り口が南壁東寄りの1個所しか確認できなかったため、大型建物全体で考えた際に、一番奥まった場所に作られた部屋である可能性が高い。そしてその部屋の真ん中突き当り(北側中央)床面に、レンガ敷きの遺構が検出されたことは示唆的である。重要な儀式が行われた部屋とも考えられ、これまでにソグドの他の遺跡(アフラシアブやベンジケント)にも見られた迎賓館などを想起させる(村上ほか2022)。今後は、隣接する南側の部屋の掘り下げとともに、両部屋をつなぐ通路の詳細を明らかにすることや、トレンチ全体を拡張して大型建物全体の様相を探

る可能性も含めて検討したい。

また大ホール焼失時に使用していた日干しレンガは、従来7世紀を中心とするものと理解されてきたが、8世紀初頭(712年と推定)の火災層に覆われていたことは、それに確かな年代の1点を与えるものである。火災以後に修復や再建で使用した日干しレンガは、すべてサイズも積み方も異なっているので、8世紀初頭はその年代の下限を示唆するものと推定しておきたい。

本稿では壁の一辺長について、日干しレンガを20枚長手積みにしたものと推定した。この日干しレンガの平均長辺幅53.2cmがソグド時代末期の尺度と関係しているのではないか、という点も今後の重要な検討課題である。佐藤武敏氏は両税法施行以前の唐の絹織物規格が幅1尺8寸(53cm)、長さ4丈(1179cm)であることを示し、田先千春氏はサマルカンド市アフラシアブ城の7世紀の壁画において中国と同様・同大の両端巻き絹織物を描いていることを指摘している(佐藤1974、田先2007)。大小の品々の製作や建築、また徴税や交易を効率的に行うためには、度量衡が必要であり、重要な歴史的意味をもつ。本調査の成果を手掛かりとして今後、鋭意検討を進めていきたい。

*本研究はJSPS科研費、JP19H01350、JP19K13397の助成を受けた成果の一部である。

■参考文献

- ・佐藤武敏 1974「唐宋時代における絹織物の規格」『集刊東洋学』第31号。
- ・田先千春 2007「古代ウイグル語文献にみえる bay について—トウルフানের棉布の規格に関する一考察—」『東洋学報』第88巻 第3号。
- ・Begmatov A., A. Berdimrodov, G. Bogomolov, T. Murakami, H. Teramura, T. Uno, T. Usami 2020 New discoveries from Kafir-Kala: coins, sealings and wooden carvings. *Acta Asiatica* 119. The Institute of Eastern Culture.
- ・村上智見・寺村裕史・宇野隆夫・A. ベグマトフ・A. ベルディムロドフ・G. ボゴモロフ・A. サンディボエフ 2022「ソグド王離宮を掘る—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2021年度発掘調査—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』23-27頁 日本西アジア考古学会。